

日本災害情報学会 「2007年 廣井賞」

授与式：2007年11月17日(土) 13:30～14:00
会場：島原復興アリーナ（長崎県島原市）



藤吉 小山 関谷 手島 阿部の各氏

功績分野で個人の小山真人氏、関谷直也氏が選ばれました。第9回学会大会で行われた授与式では、阿部勝任会長から、一人ずつ賞状と賞牌が手渡されました。

1. 選考理由

【表彰審査委員会 藤吉洋一郎委員長】

2007年廣井賞の選考にあたっては、廣井先生が目指された、実践的で現場の課題解決に結びつくこと、連携交流の促進、そして若手の励みになることなどを、基本的な評価軸としました。今回は、どのような功績が該当するのかイメージしにくかったせいか、推薦が僅かでしたが、今後、第1回受賞者をひとつの目安に、ぜひ奮って応募していただきたいと思います。

■在京ラジオ災害情報担当者会議

在京のラジオ放送局7社(NHKラジオ、TBSラジオ、文化放送、ニッポン放送、ラジオ日本、エフエム東京、J-WAVE)が機関を越えて連携し、首都圏の大規模災害時に東京電力、東京ガス、東京都水道局、NTT東日本、NTTドコモから生提供されるライフライン情報を共有する「ラジオ・ライフラインネットワーク」を構築し、1996年以来、いざというときに備え同時生放送『ラジオ災害情報交差点』を年2回、9月1日と1月17日に継続して行っており、災害情報の信頼性や確実性の向上に寄与する取り組みとして、高く評価されました。

■静岡大学教育学部教授 小山真人氏

『富士山ハザードマップ』作成に自然科学者として関わり、その成果を活用して火山防災対策に関するわかりやすい防災教育のあり方を示すなど、防災情報を一般の人々に広く普及させるべく尽力されている功績が著しいものと認められました。

■東洋大学社会学部講師 関谷直也氏

学会誌掲載論文2編をはじめとし、「風評被害」に関する総合的な研究に、社会心理学の面から継続的に取り組まれ、災害情報分野において顕著な成果をあげられていることが賞賛に値するとして選ばれました。

2. 受賞者挨拶

授与式での喜びの声を紹介します。

なお、後日発行された学会 News Letter No.32 に、受賞者より決意も新たな記事が寄せられています。

【在京ラジオ災害情報担当者会議 (J-WAVE アナウンサー 手島里華氏)】

第1回廣井賞ということで、非常に光栄な賞を受賞することができ、本当にありがとうございます。

先輩方が築いたこのネットワークについて、簡単に紹介させていただきます。きっかけは1995年1月17日、阪神・淡路大震災の日に、在京のラジオ社が協力していったい何ができるのかということ話し合い、そこからラジオ・ライフラインネットワークがスタートしました。阪神・淡路でも、ラジオが非常に役立ったというのは耳に届いているかと思います。私たちラジオ局というのは、日ごろはライバル関係にありますが、いざというときは垣根を取り払い、協力してリスナーに確実な情報を伝えていこうということで、このネットワークを立ち上げました。具体的には、大震災などが発生したとき、毎時15分に会議電話システムを立ち上げ、7社同時にライフライン情報をお伝えすることにしています。つまりそのとき、どの局にチューニングを合わせても、同じ番組が放送される、非常に画期的なシステムです。この場にいらっしゃる学会事務局の中村さん、ニッポン放送の村木さん、文化放送の高橋さんをはじめ、諸先輩方がシステムを立ち上げるまでは非常に困難を極めたと思いますが、連携してこのネットワークをつくることができました。

私は学生時代に普賢岳の噴火や神戸の震災をテレビで経験するという状況でした。今度は私たちが先輩から引き継いだこのネットワークをさらに活用できるように、ブラッシュアップしていかなければならないと思っています。本当はこのシステムを立ち上げないですむことが一番いいんですが、どうもそうはいかない、気を許しているときに何かが起こるといのが大抵ですので、密に皆さんと連絡を取り合って、今後の大規模災害に備えていきたいと思っています。現在、月1回のラインチェック、年2回の共通番組放送で、まず私たちがすぐに対応できるよう、練習を重ねています。また毎月、定例会議やライフラインの見学会などを開催し、お互い顔を合わせて親睦を深めつつ、連絡を取り合って、いざというときの連携に備えています。今後とも、皆さまに安心かつ正確な情報を届けられるよう努力していきたいと思っています。本日はどうもありがとうございました。

【静岡大学教育学部教授 小山真人氏】

最初にこの話を聞いたとき、非常に驚きました。きっと第1回だから、いろんな分野から1人ずつくらい選ばれたのではとか、火山分野だったら岡田先生や宇井先生が

最初にもらうべきではとか、いろいろ考えましたけれども、まさかこんな少ない人数のひとりとは思わなかったので、感激しています。

学術分野の受賞ということで、何かいい論文を書いたかなと自問自答したのですが、一つだけ思いあたったのは、「火山」50周年記念号に書いた「火山に関する知識・情報の伝達と普及—減災の視点でみた現状と課題」でした。しかし、どうもそれだけじゃなくて、もっと広く研究・実践活動全体が評価されたようなので、ありがたいことです。賞状をもらうというのは、小・中・高校時代を通じても全く記憶がなくて、今日は非常に緊張しています(笑)。これにおごることなく、今後も精進していきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

【東洋大学社会学部講師 関谷直也氏】

風評被害に関する二つの論文は、私の修士論文の後半部分を大幅に書き直したもので、もともと廣井先生から与えられたテーマでした。修士論文の前半は、公害や原子力報道の社会心理といった人為災害の歴史なのですが、ほかの先生方からはそちらの方が評価され、「後半の風評被害はいらなかったね、学問的なテーマではないしね」と言われました。廣井先生は違って、環境の歴史よりも、風評被害という現実の社会問題を扱った後半部分を、「何もわけがわからないところから、けもの道を歩いていこうという意気込みだけ(笑)、意気込みだけが見られた。こっこのほうがよい、まとまりがないけどな」というふうに評価してくださいました。

廣井先生の最後から二番目に書かれた論文が、風評被害のなんですけれども、初めて私の論文を引用してくださいました。それが引用していただいた最初で最後の論文になってしまいました。私は廣井先生の弟子ですので、私を受賞するという点についていろいろ議論があったかと思いますが、評価していただいたことはもちろんうれしいですし、同時に、これは廣井先生の教育者としての賞を、代わりにいただいたというふうに勝手に解釈しています。私も50年後くらい、死んだ後に、「関谷賞」を(爆笑・拍手)作っていただけるような、それくらいの災害情報の研究者になれるように頑張りたいと思います。ありがとうございました。今後ともご指導をよろしく願いいたします。

3. 「2007年廣井賞」を振り返って

「2007年廣井賞」に輝いた皆様、誠におめでとうございました。授与式での嬉しそうな笑顔が印象的で、廣井先生もきっと喜ばれたに違いないでしょう。

初の廣井賞、いかなる賞であるかの理解を深めていただくために、また今後に向け、制度創設の経緯から振り返ってみたいと思います。

2006年4月18日、明王山宝泉寺での通夜、「示教院文海脩徳居士」の位牌と遺影の前で、そして翌日の葬儀、線香をあげに伺った5月15日、さらには翌月の命日にも本郷佐とうに縁の深かった多くの人たちが集い、廣井先生の恩に報い、拓かれた道をこれからどうつないでいけるか、駆り立てられるような思いを皆で語りあいました。また、77日忌法要を終えたご遺族から、後進の育成に役

立ててほしいと寄付を賜り、賞創設に向けた空気が醸成されていきました。片や、9月9日、アルカディア市ヶ谷で開かれた「廣井脩先生を偲ぶ会」にあわせ、膨大な貴重な資料を基に『やーやー廣井です』が刊行されました。これらは東京大学情報学環とともに、慌ただしいなかで成し遂げられた追悼記念行事です。

その後、第8回学会大会の理事会・総会で、浄財を基金として学会に廣井賞を設けること、廣井賞表彰審査委員会を組織し、会員からの推薦を受け付け、第9回大会時に初めての表彰を行うことが決まりました。

委員会では、「廣井先生らしさ」を前面に出して準備を進めました。単なる功労賞でも、論文賞でもない。例えば、研究成果が社会に還元される、現地で困っている被災者のためになる、幅広い人たちとの輪などが、独特のキーワードでした。学際的・独創的・実践的・課題解決的な活動こそが、われわれの目指すべきアカデミズムやアクティビティではないかという考えです。さらに、表彰に一層の活躍に期待する願いを込めることでも一致しました。そして11月22日、公募を開始しました。

ところが、期限の2007年4月15日、廣井先生の命日までに学術的功績分野の応募がなく、推薦が僅かしか届きません。ご自身「けもの道」と称された分野で2年間限定が厳しすぎたのか、などと藤吉委員長と責任を感じつつ、青龍山林泉寺への墓参の帰途、また佐とうに立ち寄り「神の河」を酌み交わしました。

翌日の委員会では、推薦がないからといって初回から該当なしは避けるべきだという意見が大勢でした。ただ、8名の委員だけで災害情報分野の研究すべてを公平に見渡すことができません。このため、学会における本来の学術成果発表の場であり、奨励されるべき会誌掲載査読論文の筆者(選考委員を除く)であることを条件に、今回は選考する方針としました。まず10編の優秀論文を絞り込み、それを手がかりにして前述の「らしさ」の観点から総合的に審査を進めました。その結果、学術分野では甲乙付けがたい2名の名前があがり、8月23日、いずれも廣井賞に相応しい3候補が選ばれました。その後理事会に諮り全員の承認を得、11月17日、雲仙島原の学会大会会場において、晴れて表彰するに至ったわけです。

いま、2008年候補募集の締め切りが迫っています。一人でも多くの会員の推薦に基づく選考審査ができることを望んでいます。社会も学術も、個人も団体も、若手もベテランも、文系も理系も、実践も理論も、広く応募してもらうことで、さらに廣井先生らしく、かつ権威のある表彰制度になっていくものと信じています。

最後にお礼です。島原では、阿部会長、村木正顕氏、高橋和雄委員長をはじめ第9回大会実行委員、事務局中村信郎主管らに尽力いただき、本当にいい授与式になりました。また、中川和之氏、森岡千穂氏らの労に呼応し、大会参加者からは基金へ多くの寄付が寄せられました。お陰様で廣井賞が永く続けられそうです。委員一同、深く感謝しています。ありがとうございました。

(廣井賞表彰審査委員会幹事 アジア航測株式会社・
独立行政法人防災科学技術研究所 天野 篤)